

日本災害看護学会 令和6年能登半島地震・能登豪雨災害看護プロジェクト活動報告

報告年月日：2025年2月12日（水）

活動隊員：朝田和枝、紫宇代、花房八智代、作川真悟、佐々木久美子、酒井明子

1. 活動期間

2025年2月2日（日）10時00分～13時00分

2. 活動場所

珠洲市正院公民館（石川県珠洲市正院 22-2-1）

3. 珠洲市の被害状況

1) 令和6年能登半島地震(珠洲市)による人的・建物被害の状況

（令和7年2月6日14時現在 石川県庁 危機対策課 第188報）

人的被害 死者：157人 うち災害関連死：60人 負傷者：重症47人、軽症202人

住家被害 全壊：1,749棟、半壊：2,084棟、一部損壊：1,750棟 非住家被害：6,314棟

避難所開設状況：0箇所 避難者数0人

2) 令和6年奥能登豪雨(珠洲市)による被害等の状況

（令和7年2月4日14時現在 石川県庁 危機管理監室 第42報）

人的被害 死者：3人 負傷者：軽症9人

住家被害：全壊：14棟、半壊：62棟、一部損壊：8棟 非住家被害：126棟（公共建物調査中）

避難所開設状況：1箇所 避難者数9人

4. 珠洲市正院地区の現状

正院町は、令和5年5月5日に発生した令和5年奥能登地震でも最も大きな被害を受けていた地区である。中央開発株式会社の[令和5年（2023年）石川県能登地方を震源とする地震（仮称）報告書](#)では、正院地区は道路の沈下、道路の亀裂、民家の倒壊、屋根瓦の落下、ブロック塀の倒壊、墓石の倒壊など、珠洲市街地の中で最も大きな被害が確認されたと報告されていた。また、令和6年12月に正院地区の若手有志の会「正院町ワーキンググループ」が行った全町民アンケートでは、正院地区の世帯数や町民数について下記のように報告されていた。

令和6年能登半島地震前の正院町の世帯数：606世帯

現在の世帯数（2024年12月時点）：316世帯

令和6年能登半島地震前の正院町の町民数：1,309人

現在の町民数（2024年12月時点）：696人

5. 応急仮設住宅の状況 建設型応急仮設住宅（正院地区）

< 令和5年奥能登地震における応急仮設住宅 >

石川県珠洲市 正院団地跡地 4戸、正院立町 6戸、正院ゲートボール場 6戸

< 令和6年能登半島地震における応急仮設住宅 >

- ・正院町第1団地（正院小学校グラウンド（1期））40戸
- ・正院町第1団地（正院小学校グラウンド（2期））36戸
- ・正院町第2団地（正院ゲートボール場）48戸
- ・正院町第3団地（旧飯塚保育所）19戸

・正院町第4団地（うじま公園）27棟

6. 支援活動の実際

1) 正院町未来会議設立総会への参加

正院町では、令和6年能登半島地震後、4月2日から「地域コミュニティの構築を考える会」が発足し、全区長、民生委員、婦人会、青年団など地域の各種団体の参加を募って、意見交換会や勉強会が行われてきた。第5回目からは、日本防災士会理事長である室崎益輝氏をはじめ県外から外部講師を招き復興塾と改名し正院のまちづくりの方向性について議論されてきた。そして、8月28日には、30年後の未来を考えられる町民を対象に若者有志を募り「正院町まちづくりワーキンググループ」を立ち上げた。毎週木曜日19時から正院公民館で開催し、「理想の正院町を考えよう」、「現実的な復興案を作ろう」、「正院町の歴史を知ろう」などについて話し合われてきた。また、全町民アンケートを実施し、正院町がどのような状態なのかの現状や、復興に関してどういった意見を持っているのかを調査してきた。全員の意見を聞き、誰も取り残さないまちづくりを行うために全町民が会員のまちづくり協議会を立ち上げようと、組織案や規約の作成を行い、今回の正院町未来会議設立に至っている。

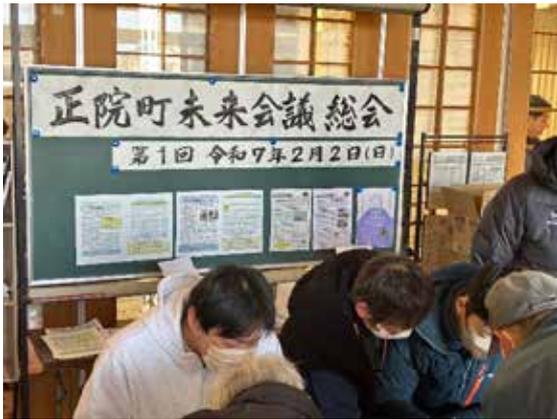
設立総会には、正院町から82人が出席、279人が委任状を提出した。珠洲市泉谷市長も来賓として挨拶し会が始まった。議長選出後、これまでの活動報告、規約、役員選出、令和6年度及び令和7年度の活動方針、収支予算といった5つの議案が提示され意見交換が行われた。参加した町民からは、「この会は区長会とは別な組織なのか」「具体的に今後どうやって行くのか知りたい」「事前に総会の案内が町民に封書で配布されたが、何のことかわからず封を開けていない方もいる。もっとわかりやすい説明が必要ではないか」などの質問があり、事務局の担当者が一つ一つ丁寧に回答していた。また、総会後には、若手有志の会が取りまとめた「正院町の復興に向けて～全町民からのアンケート～」についての報告があった。アンケート回収数は391枚で町民の約半数から回答があった。内容は主に住民の現状の住まいについて、今後の予定について、災害公営住宅について、正院町に残したいものについてなどの結果が報告されていた。

当学会は、総会前に参加した方々へのお茶や珈琲の提供、終了後住民が帰られる際には、玄関先に準備したお祝いのぼたもちやカイロの配布を行い、町民の方々のこれまでの労をねぎらい、町民自らの新たな出発を祝福した。

7. 支援活動を通しての所感と課題

正院町は、地震発災後、地区の消防団が生き埋めとなった住民を救助する、500人近い避難者が集まった小学校の避難所を地区の自主防災組織が災害対策本部として運営する、運営スタッフは避難者名簿の作成、物資班、衛生班、炊き出し班などの役割を分担し活動する、応急仮設住宅への転居後には集会場を活用し地域住民を巻き込んだお茶会の開催、子供達への学習支援や遊び場の提供など、様々な工夫をしながら復興に向けて取り組んできた。そして、今回の未来会議設立に至っている。住民自らが自分たちの未来について考えるということは、早期の復興に繋がり、新しい素敵な地域が出来ていくのではないかと、これから先が楽しみだと感じた。住民が一丸となって取り組めるよう、学会としてこれまでの災害の知識や経験を提供しながら、支えていく必要があると思われた。

8. 写真



正院町未来会議総会受付の様子



来賓（珠洲市長）挨拶の様子



全町民アンケート結果報告の様子



総会終了後のぼたもちとホッカイ口の配布の様子